

# 記念講演「雪舟：中国から見た日本文化」

山東芸術学院院長 張志民（通訳：范偉）

- 1986年 済南市「張志民書画展」開催
- 1988年 カナダ「張志民書画展」開催
- 1993年 作品「路遥遥」、全国第一回中国画展入選  
作品「夕照図」、全国中国画山水画展優秀賞受賞
- 1994年 「中国現代芸術家画庫・張大石頭画集」出版  
(中国画報社)  
作品「將軍出山」、全国第八回美術展入選
- 1995年 作品「鉄道遊撃隊(合作) 抗日戦争・世界反ファシズム  
戦争勝利50周年記念全国美術展銀賞受賞、  
山東省一等賞受賞  
著作「中国画技法・山水篇」出版(山東美術出版社)
- 1998年 作品「丘壑無言」、98国際美術年中国山水画・  
油絵風景画対比展入選  
「中国画傑作集・張志民」出版(山東美術出版社)
- 1999年 著作「山水小品研究」出版(山東美術出版社)
- 2000年 中国美術館「齊風山東山水画6人作品展」出品  
同作品、国連55周年世界和平美術展金賞受賞、  
国連ユネスコ世界教育者大賞受賞
- 2001年 作品「將軍出山」、中国共産党建党80周年全国美術展  
大賞受賞、山東省特等賞受賞  
著作「中国山水画構図研究」出版(山東美術出版社)  
著作「山水画技法」、「中国画名家叢譜・張志民山水小品」  
出版(湖北美術出版社)  
中国美術館「2001・中国画9人作品展」出品  
作品集「張志民画集」出版
- 2002年 中国歴史博物館「世界文化遺産在中国大型画展」出品



日本の友人の皆さん、本日ここで皆さんと一緒に画聖 雪舟について話し、また親しく交流できることは非常に光栄に存じます。中日の水墨画交流が、特に川崎町で過去2回にわたって行われ、今回3回目の交流展が実施されることは、相互の交流がますます深まっていることを象徴していると言えます。中国の画家と山東省女流画家協会を代表しまして、このような機会をつくっていただいたご臨席の皆さん及び関係の方々に厚く御礼を申し上げます。

雪舟先生は日本の偉大な水墨画家であり、中国人にも非常に尊敬されている水墨画大師です。先生の中国での生活、経歴と、中国の芸術、山川、風物、人情に対する体験は、雪舟先生の芸術家としての生涯の中で重要な位置を占めており、また先生の芸術の風格の形成に非常に重要な役割を果たしました。特に雪舟先生が中国留学で学び習得した体験は、中日文化交流の使者としての大きな財産であったと言えるでしょう。

中国 明王朝の開国初期、王朝は政権を固め、社会を安定させ、生産を回復させるために積極的な措置を講じました。例えば、商工業を振興し、手工業の奴隷を解放し、自由経営を許可したため生産は早く回復することができました。また、外国との経済及び文化、芸術の交流も強化されました。明王朝何世代の皇帝はそれぞれ文学と芸術を愛好し、特に絵画に堪能であり、鑑定と収蔵に熱心で、皇帝の代が



替わるたびに「画院」を設置するなど、王朝276年間に絵画芸術は大きく発展しました。

明王朝は、南洋、中央アジア、日本、朝鮮との文化交流と往来を再開しました。鄭和を西洋に7回派遣し、対外交流の強化によって中国の伝統絵画に新鮮な血液と活気を与えることになりました。特に、中国と日本の間に商業、文化の交流、往来が盛んに行われました。雪舟先生はこうした歴史の背景のもとで中国を訪れました。

雪舟先生は1420年に生まれ、1506年に亡くなられました。本名が小田等楊です。日本の室町時代水墨画の最も優れた代表者で、中国の宋王朝、元王朝の中雲宗派の創立者です。

1467年、雪舟先生は日本の幕府遣明使と一緒に中国に派遣されました。水墨画の源を求め、また名家の指導を得るために寧波から運河をさかのぼって北京に行き、明宣徳画院の画師 李在と出会い、絵画の技法について研究しました。

明の時代には多くの絵画の宗派が存立し、宗派によって多様な見解がありました。その中に浙江宗派、江夏宗派、呉門宗派などがあります。李在は雪舟先生の先生でもありましたが、友達でもあります。彼は浙江宗派に属しました。浙江宗派は当時割合大きな影響がある宗派の一つで、明王朝の初期から嘉慶にかけて盛んでした。この宗派は、南宋王朝の李唐、夏圭を源にし、筆法についてはよく頓跌法を用い、遠近法を重んじるといった表現の特徴を持ちました。戴進は浙江派の創立者で、李在はこの宗派の著名な画家です。李在は山水に堪能で、書画同工、筆勢の秀麗飛揚、墨の濃淡明暗、色の淡彩清雅といった特徴を持っています。李在の作品は「琴高乗鯉図」「溪山雲閣図」などがあります。後者は現在、日本の国立博物館に所蔵されています。

雪舟先生は、南宋王朝の馬遠、夏圭の画風に憧れました。馬、夏の山水は南宋王朝の時代の一時期に圧倒的な勢いを持った絵画宗派で、この画風は元王朝になっても衰退せずに明王朝の時代になってさらに大きな発展を見せました。馬、夏両者の絵は共通したところが多く、筆法と構図に特徴があり、画面が額の幅に溢れずといった説があります。このように画面の中に空間をつくるため、これを「馬の一角」と「夏の半分」といった構図法だと呼ばれています。

浙江宗派は南宋王朝の馬、夏の画風を受け継いでいます。雪舟先生は明王朝に滞在している間に浙江宗派の影響を大きく受けました。この時期に先生が描いた「四季山水図」は明らかに浙江宗派の画風を持っているため、彼が李在に習ったという説は実証されています。

雪舟先生は明の皇帝 憲宗に気に入られたため、宮殿に入って礼部院中堂の壁画の創作を命じられました。壁画が完成した後、皇帝も大臣も称賛し、各方面の人々は壁画を鑑賞し、雪舟先生の名声は明王朝の朝野に広がっていきました。

雪舟先生は北京で多くの称賛を得ましたが、先生が期待した名家を見つけることができませんでした。その後、先生は北京を後にして南の浙江省に入り、寧波の四明山天童寺で出家しました。仏法を学びながら絵を描き、引き続き名家と画友を訪ね、中国歴代名家の傑作を研究、模写し、水墨画の色合いと破墨の技法を

学びました。先生の優れた業績は「天童寺の中の第一座」、すなわち一番の人材だと称賛されました。

雪舟先生は名山大川を遊覧し、風土世俗を観察し、江南の雄大壮麗な大自然に無限の感慨を覚え、これこそ「最もよき師匠」「大唐の画風」だと感動したと言われています。雪舟先生の芸術追求は、中国の古人が言った「古人に学ぶが、造化にも学ぶべし」、すなわち絵描きが古代の名家だけでなく大自然をも師匠にし、真の山、真の水を感じた上で創作すべきだという芸術理念に完全に一致したものとと言えます。

その後、雪舟先生の絵は宋王朝、元王朝の水墨画の基礎のもとで重大な変化をもたらし、画風写実、気迫豪放、筆墨雄渾という特徴を持つようになりました。例えば、先生の作品「天橋立図」は現在京都国立博物館に所蔵されており、実地写実の傑作で、日本の風土を十分に表現したものです。この作品は雪舟先生の代表作の一つで、この写実の画風は先生の作品の中でよく表れています。

雪舟先生は多彩多様な才能を持った現実主義画家であり、山水だけでなく楼閣、人物肖像と花鳥などにも精通していました。先生の「益田兼堯像」は、大和風格を持っている肖像画です。また、雪舟先生が日本の山口県で「天開閣画楼」を新築した後に創作した「四季山水長巻」は先生の代表作です。雪舟先生は馬、夏の絵画様式に基づいて大自然の観察の中から自らの絵画様式を構築し、山水画の日本化を実現させました。雪舟先生の代表作には「煙雨山水図」「四季山水図」「天橋立図」「秋冬山水図」「慧可断臂図」などがあります。

1469年に雪舟先生は帰国し、豊後で「天開閣画楼」を建築し、そこで絵の創作と研究を行いました。この時期の先生の芸術活動は日本の友人の皆さんが私よりご存じですから、この説明は省略させていただきます。

要するに、雪舟先生の絵は宋、元水墨画の基礎の上で重大な変革を実現しました。先生は遠近法を創立させ、画面の深さ、広さ、大きさを感じさせ、日本画に技法、オブジェ、風格の面で変革をもたらした個性豊かな画家です。雪舟先生の技法は非常に迫力に満ち、大自然に対する強烈な感銘がその力強い筆法の中に表れています。この中から先生の画風形成に対する馬、夏の影響が見えますが、結果的に雪舟先生は日本の特色ある自らの絵画様式を構築することができました。

中国の美術史評論家 劉曉路氏は『日本美術史話』の中で、「世界の中で1万年以上も連続して耐えない美術史を持っているのはただ二つしかない。一つは中国、ほかの一つは日本である」と論じています。これは中日両国の画家が共通して誇るべきことです。海一つを隔てて相対している悠久の歴史を持つ両国は、文化の長い川の流れの中で絶えず交流、往來を繰り返してきました。歴史上多くの「遣隋使」、「遣唐使」、「遣明使」が中国を訪れ、特に唐王朝の鑑真和上が日本に渡り、また明王朝末期には中国の画僧 逸然が日本に渡って逸然宗派を創立したことなどは私たちに深い感動を与えてくれました。

遠い古い時代、交通手段が今日のように発達していない時代にもかかわらず、両国の先人たちは中日の友好交流のために海上の暴風に多くの犠牲を払いながら青春の歳月、無数の心血を捧げてきました。この先人たちの犠牲の上に、中日両国の水墨画の鮮やかな花の根は、歴史と文化が積み重ねた土壌の中で成長、発展してきたのです。だからこそ、私たちは必ず中日水墨画の交流をさらに発展させていかなければならない使命を持っていると思います。

最後になりますが、私たち中国・山東省女流画家協会は、1985年に日中水墨交流協会と最初の交流を成



功させ、その伝統を受け継いだ日本全国水墨研究会とその交流をさらに発展させてきました。特に福岡県、川崎町の皆さんの温かいご尽力で、既に2回の交流展を成功させ、ここに19回目の日本の国民文化祭に参加するという光栄をいただきました。

私たちは、この交流の歴史の中で中日両国が一衣帯水であり、両国の文化で結ばれている親近感を深く感じています。特に、私たちは以前日本の古都奈良を訪問した際に、鑑真和上と日本の建築家が共同で築造した唐招提寺を見学した時の感動をあらためて思い出しています。

私たち中日水墨画の交流活動は、雪舟先生の足跡に沿ってさらに発展し、両国の水墨画家の交流、往来がさらに進み、その友情が永遠に続いていくことを心から願って私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)